

## 答志における寝屋子研究

泉 正幸  
 (鈴鹿短期大学)  
 臨床心理士

## 1 はじめに

三重県鳥羽市には古くから寝屋子制度が存続してきた。鳥羽市答志町には現在もこの寝屋子は継続されている。文献によれば鳥羽市以外でも全国各地の漁村に多くみられた。答志島は答志地区のほか和具地区、桃取地区の3つに分かれ、それぞれにかつて寝屋制度があった。しかし現在も継続されているのは、この答志地区にしかない。また同じ離島である神島や菅島などにもあった。三重県中勢部香良洲地域にもあったといわれている。子どもが大人に自立していく青年期、答志の子どもたちは寝屋親—寝屋子という擬制的親子関係をとおして成長していく。青年期の育ちが答志で生活する人たちの人間関係を形成している。この寝屋子についてはすでにいくつかの先達の研究論文があり、多方面から関心もたれている。答志地域で寝屋子という呼び方をしているものの、他の地域によっては「若者宿」、「若衆宿」、「若者組」などと呼ばれ、同じようなものが各地に存在してきたことが文献的に明らかとなっている。筆者にとって、現地調査に入るたびに新しい発見に出会い、資料収集を行っている。答志地区では毎年新しい寝屋子が結成され、10年ほど寝泊まりした寝屋子たちは朋友会へと移行していく。結婚すると寝屋には泊まらなくなり、親戚同様の付き合いへと進んでいく。今日まで継続されてきた理由に、社会的相互扶助のつながりとして寝屋子制度(慣習)は、答志では必要と言われている。漁師の後継者育成、地域の祭り行事の継承、相互扶助や生活共同意識に寝屋子制度は大きく貢献している。青年期の育ちは将来の人間関係に大きく影響する。寝屋子と寝屋子の横の関係や寝屋子—寝屋親の縦の関係で結ばれている生活に今日の社会に示唆するものがあるのではないかとの思いで現地調査をすすめている。

## 2 答志の地理、人口、産業、学校

答志島は鳥羽市の4つある離島(坂手島、菅島、神島、答志島)のうち一番大きな離島である。人口2,687人(男1,271人、女1,416人)で

答志地区	337世帯	1,330人(男629人、女701人)
和具地区	151世帯	501人(男237人、女264人)
桃取地区	257世帯	856人(男405人、女451人)

(平成17年国勢調査)

漁業関係者が一番多く約8割を占めている。カタクチイワシ、シラス、サバなどがよくとれる。観光業の発展にも力を入れており、戦国武将の九鬼嘉隆の塚やそれよりも前の古墳群など歴史散策や答志ハイキング夏の海水浴などがあり、島外の人を答志に呼ぶ努力をし答志島の活性化や振興につとめている。

鳥羽市答志中学校 2010年7月16日訪問

答志中学校 答志中学校長と面談

答志地区と和具地区の2地区が学区である。桃取地区は船で鳥羽東中学に通学している。

全員が高校進学、鳥羽や伊勢方面に通学、下宿している子もいる。鳥羽港発は6時45分答志港、和具港へ、また夜8時10分発の桃取港への最終便である。朝は6時50分に答志港を出て7時30分に鳥羽(佐田浜)港につく船便が通学、通勤になっている。

校長の言によると答志中学の生徒たちはおだやかでまじめ、情にあつく、友達を大事にするという気風を持っているとのことである。

<校長のエピソード>

修学旅行の帰りが大幅に遅れ、鳥羽（佐田浜）から「桃取港」へ最終便で帰ることになった。本来「和具港」または「答志港」へ着かないと帰れない。「桃取港」からは5Kmほど離れている。急な変更に関わらず、保護者の代表が「桃取港」まで迎えに来てくれ、各生徒を家まで送り届けてくれた。答志の連帯のよさに感激した。

学年 / 生徒数	男	女	計
1年生	9	6	15
2年生	8	8	16
3年生	9	11	20
			計 51名

(平成22年7月現在)

過去の卒業生

21年	8	10	18
20年	10	4	14
19年	11	14	25
18年	5	11	16
17年	13	11	24
16年	14	5	19

### 3 寝屋子の歴史

民俗学者和歌森太郎の「志摩の民俗」（1965年初版、1974年第2版）の中で、ネヤ（寝屋）制度について説明がある。「寝屋は成年期（15歳中学卒業時）に達した男子が、ふつうは婚姻の成立するまで部屋に余裕のある家を宿舎としてグループを組んで共同生活をする若者宿のことをいう。志摩地方では若者宿のことをネヤ、ワカシユヤド、トマリヤなどと呼んで、明治時代末期までは多かったが近年ではほとんど消滅した。その中で答志島が唯一その伝統を残すところとなっている。グループの若者たちを寝屋子、部屋を貸し寝屋子の世話をする人を寝屋親と呼んでいる。寝屋親は寝屋子の教育の責任をもって厳格な態度でのぞみ、寝屋子同士も「朋輩」として結合心が強く、生涯助け合っていくといわれる。同じ年頃の仲間が、食事を実家でとる以外は、寝屋で寝起きを共にする風習は江戸時代以前にもさかのぼるといわれている。寝屋制度が作られた理由には諸説があつて、一つは昔の漁村の家の多くが平屋建てで家が狭く、適齢期の青年を同居させておくことが不都合であり、娯楽がなかったこと、また一つは漁業では欠かせない集団、団体行動と協力の精神を共同生活で養わせるため、もう一つは寝屋親の厳しい監督のもとで人格形成の場とするということである。両親には話しにくい結婚問題などを寝屋親に頼んで解決してもらったり、寝屋子同士の協力も得られやすい環境の中で、修養し社会の一員として育っていくのである。」と記録されている。

また鳥羽市教育委員会が発行した「鳥羽市に於ける寝屋制度－志摩郷土会編」（1965年）では、9名の執筆者たちが寝屋子制度のことを論じている。①鳥羽市における寝屋制度、②神島の寝屋制度、③桃取の「ねやこ」、④答志の寝屋子、⑤寝屋子、⑥答志の若者組について、⑦志摩地方の民俗寝屋の制度、⑧鳥羽領の若者制度、⑨志摩の「ねんや」のこと、などの表題で論じられている。鳥羽市教育委員会が発行しているため鳥羽市の地元の人たちあるいは県内の人たちが執筆している。そしてその時点における寝屋子について「鳥羽市における寝屋子制度が1964年に鳥羽市が市政10周年を迎えたときには答志、桃取、神島、に残っていた」が「菅島、坂手にも最近まであつた

が今は姿を消している」と記され、現時点で答志のみしか残っていないことを考えると、約45年間に答志以外のところでは存続し得なくなっていたことがあきらかである。

#### 4 答志における寝屋の状況

内山論文によると答志には平成20年2月現在で10軒の寝屋子があり、内山論文の中の寝屋子一覧表を元にして最近の状況をまとめたものが別紙表1になる。

→ 別紙 表1 参照

寝屋子たちは寝屋親のことを「オヤジ」と呼び、寝屋母のことを「カアサン」と呼んでいる。また寝屋親から寝屋子を呼ぶ時は「アニキ（アニキラ）」と呼ぶ。

#### 現在の寝屋親の話

M.N. (64 漁師) さん

<寝屋子一親の誕生>答志の子どもたち（長男）が中学3年生になると、その保護者たちは寝屋子先（寝屋親）を探す。M.N.も保護者から依頼されて、家族と相談して引き受けた。M.N.の家は息子の嫁が答志の人ではないため、嫁に気を使って寝屋子のことを説明し、理解してもらうことになった。またM.N.の年齢が60歳代であるため、高齢になって寝屋子たちと付き合いができなくなっても、息子夫婦らで付き合いってもらうためには、若夫婦らの意見を聞いておく必要があった。息子は寝屋子経験をしており分かっているが、嫁の意見が一番大事になった。家族は祖父母夫婦（80歳代）、親夫婦（M.N.夫妻）、息子夫婦（30歳代）、息子の子供2人、それに独身の娘（20歳代）、全員で9人家族、その上に4人の寝屋子（20歳）が入る。

<寝屋親>家は平成15年に新築した3階建てである。寝屋子をおくことを前提にして建てた。平成19年4月から2階6畳間に4人の寝屋子をおいている。4人のうち2人は高校を卒業し、漁師となっている。ひとりは鳥羽商船高校、ひとりは名古屋の大学へ行っている。屋号は「〇丸」3代目を継ぐ。3代目に寝屋子を初めて取った。親の代から漁師で今は息子とやっている。バッチ網が主で、答志のバッチ網船は現在16船団、32船が活動している。

<漁師>若漁師は朝3時起きで仕事に出る。荷揚げの冷蔵氷を積み込む作業の関係で、答志港出航は5時頃になる。バッチ網漁は市場値段がほぼ安定しており、水揚げの良いときとそうでないときがあるが、白子や白塚などにも買い取り値段の情報を聞いて高いときは持っていく。答志港へ帰港は11時頃になる。漁場の良い情報を仲間で連絡を取り合い、高い買値市場（白子漁港か白塚漁港か）へ運搬する。

<嫁さん>答志へ嫁が来るとき、「船に乗るのか？海女になるのか？」という先入観があった。今日では10年くらいは船に乗らず主婦業となる。約8割が答志外から嫁を迎えるようになった時代で、今までのやり方では嫁さんが来なくなってしまう。変えていかないと意識がある。嫁さんは子どもが大きくなり、少し手が離れるようになってから、仕事のことは考えたらよいということになっている。

<バッチ網漁>昔は夫婦舟<sup>めおとがね</sup>という夫婦で沖に出ていたのが当たり前であった。バッチ網漁（一つの網を二つの船で引っ張る）になってから男たちで漁をするようになってきた。今は4年生大学を出て漁師になっている者、Uターン組の者などが漁師になっている。答志にも3名くらいおり漁師を継いでいる。バッチ網は比較的収入が安定

している。生活が安定できることから後継者ができてくる。昔は長男があとを継ぐというのがあたりまえようになっていたが、最近はそうではない。答志で生活ができることを考えないと後継者は留まらない。最近は高級魚の値段が下がって、以前に比較して値段が半減に近い状態になってきた。また一本釣り漁は難しい時代に入ってきた。高校卒業して漁師を継がせることもなかなか難しくなっている。が、バッチ網漁には若者が後を継げる。

<寝屋の生活>今日の寝屋子たちはそれぞれの寝屋によっても違うが、1ヶ月に1回程度、金曜日の夜（あるいは土曜日）か、祭りの前後に寝屋に泊まりに来るだけとなっている。昔のように毎日寝ていない。今は自分の家に部屋があって、TVもあってという時代になっている。高校生のころは土曜日ごとに来ていたが、年齢が上がるに連れ寝屋に来てみんなと一緒に寝ると言うことが少なくなってきた。

<漁師>寝屋子の二人は高校卒業してすぐに船に乗っている。はじめは親が教えるが、若い子は覚えるのが早いのですぐに一人前になり、人工衛星のGPS機械を操作し、漁場何メートルなどレーダー魚探を操っている。昔は山の2点の位置を覚えたり、大潮小潮で決めたものだが、今は若い者が機械で情報を収集して。仲間と連携を取って「ちりめん」などの荷揚げがあがる時は、お互いに助け合って作業を行っている。かつては、漁師によっては漁獲量の多い少ないの格差があったが、今ではどの船でも大体同じくらいの漁獲量になってくる。漁場の様子とか市場の様子とかはすぐに伝え合っている。

<朋友会>現在答志にいる人たちで、寝屋子の経験のない人はほとんどいない。経験がなくてもどこかの朋友会に属している。以前は寝屋子の構成員の年齢が違っていたが、今は同級生たちで寝屋子を組むようになった。以前は6畳に10人くらいが寝ていた。雨降りなどは一日中寝屋にいて仲間と一緒にいたものだが、今は鳥羽市営駐車場に自家用車がおいてあり、土日になると車で遊びに行く時代になっている。

<クラブ活動>寝屋子の高校生は野球部には入っていたので、帰りが遅かった。鳥羽（佐田浜港）からの最終便が夜8時（桃取港）につく。親が桃取港まで車で迎えに行くという生活。高校で運動クラブをしている場合はほとんどが最終便で帰ってくることが多い。

<女たち>昔は女の方は「神祭」(旧正月-2月)から盆まで答志にいて「習いごと」をしたり、海女をしたりして過ごし、盆が過ぎると「神祭」まで県外(愛知県)に働きに出ていた。昔は答志の中で、寝屋子たちが「娘遊び」として晩に遊びに行き結婚相手を見つけたものだった。盆が済むと2月まで半年間女は働きに行き、毎年帰ってきていた。ほとんどが答志の中で相手を捜した。今は男も女も高校へ行くようになり、このような習慣はなくなっていく。ちなみにM.N.の奥さんも答志の人。海女の練習をし、磯桶もみんな持っていた。それが嫁入り道具であった。海女をしない女は答志にはおれんような感じやったからほとんどが海女をしていた。最近は海女を若い子らは敬遠する。夫婦船で沖に行ったときに、お金になるので、海女は兼業ですくらいである。

<これから>寝屋子をとって一生のつきあいをするという考えがある。この慣習はあったほうがええとの。内容は時代にあったものに変わっていくだろうけれど、「オヤジ」、「カアサン」と呼び、結婚するときは寝屋子のオヤジに相談している習慣は今も続い

ている。寝屋親には責任がある。離婚話しも考えられが、寝屋子のおやじに相談して中にはいってもらって、うまくおさまることもある。10代20代だけでなく寝屋子-寝屋親との関係はあとあと続いていくし、兄弟親戚同様のつきあいとなる。

#### 中学校教師で寝屋親経験者の話

過去の寝屋親経験者で昨年まで答志中学校の教頭を歴任、鳥羽市内の中学校校長をしているT.N.さんを訪ねる。

2010年8月26日

<省略>

#### 5 漁業を支えていく寝屋子制度

答志の基幹産業である漁業を支える制度として漁業従事者には寝屋子制度はなくてはならないものになっている。漁業の生活改善に若者の活躍は大きく、漁業のことだけでなく広く地域活性化に取組み

鳥羽市答志(海)と伊賀市比自岐(山)との交流事業や海の生活体験など子どもたちの交流にも力を入れている。

#### 6 地域行事、文化を支え、地域共同生活者、互助組織としての寝屋子制度

地域の行事「神祭」、冠婚葬祭など生活の支え手としての若者の存在と若者衆としての生活共同体意識を芽生えさせる制度になっている。

#### 考察

・「オヤジ」、「カアサン」、「アニキ」など擬制的親子関係、家族関係は人間関係において親密さや近親化をもたらすし、同年の仲間で寝泊りを一緒にすることはお互いの関係を深め、連帯感や仲間意識を醸成する。青年期の年齢はこのような親密さを求める時期でもあり、若者の特性でもある。

・しかも公民館、青年会所のような、若者が集まる場所での寝泊りではなく、個人の家庭に一室が若者の集まる場所として提供され、個人宅の親家族の下で、寝泊りがされ、共食こそしないが、共寝をしながら時間を過ごすという経験は、人間の心理的距離を深め、本来的に人間が求めているものといえる。

・現に神島の寝屋子が崩壊していった背景の一つとして、個人宅に寝泊りしていた寝屋子慣習の時期から青年会所が出来て寝泊りするようになってから、崩壊の一途をたどることになっていったと言われている。

・個人宅の一室での寝泊りは、オヤジ、カアサン、アニキと呼び合い、擬似的親子関係が成立していることこそ、寝屋子の解散後も朋友会として長く続いていける関係の基盤がつけられていくのだろうと考えられる。

・また答志地区は自宅に鍵をかけることをほとんどしない。寝屋子たちがいつでも入れるよう出入り自由にしてある。人と人との地域の開放性、信頼性が醸成されてのことであるが、寝屋子社会が作り上げた生活の慣習ともいえる。

#### まとめ

青年期の成長発達時期に、他人の家で寝泊まりし、同世代の仲間が一室に集まって、時間を共にする。寝屋親から先輩漁師として漁業技術、社会人として「しつけ」がされることの意味は教育的ともいえる。青年の心の発達と成長の過程で心の奥にいつまでも残りその絆をはぐくむ寝屋子制度(慣習)はその意義が再考されている。今日では学校時代にキャンプや合宿などの機会は少なくなり、薄れてしまっている。青年期の子育てとして地域社会の中で形成された寝屋子制度(慣習)は、今日社会から見て教えられるものが多いと考えられる。

表 1.

寝屋子の年代系譜

年度	寝屋(屋号)	カナ	寝屋親(年齢)	職業	寝屋子年齢	構成人数	寝屋子の内訳
平成 9年(1997年)	久太郎	キュウタロウ	△下△久(52)	漁師	30	9	漁師5社会人4
平成10年(1998年)	佐良	サヨシ	△村△良(54)	大工	29	8	漁師3社会人5
平成11年(1999年)	幸康	ユキヤス	△力△康(40)	漁師	28	7	社会人7
平成12年(2000年)	嘉七	カヒチ	△富△司(57)	漁師	27	5	漁師1社会人4
平成13年(2001年)	○キ	マルキ	△下△猛(42)	漁師	26	7	漁師4社会人3
平成14年(2002年)	春吉	ハルヨシ	△本△文(63)	(元)定期船 乗務員	25	6	漁師1社会人5
平成15年(2003年)	浜保	ハマヤス	△崎△導(64)	町内会長	24	4	社会人4
平成16年(2004年)	幸太郎	コウタロウ	△本△幸(42)	水産加工	23	7	漁師1社会人6
平成17年(2005年)	次年度と合流						
平成18年(2006年)	九七	クヒチ	△口△明(42)	漁業	21-22	6	社会人6
平成19年(2007年)	○九	マルク	△村△貢(64)	漁師	20	4	漁師2学生2
平成20年(2008年)	米吉	コメヨシ	△下△哉(42)	水産加工	19	4	社会人4
平成21年(2009年)	次年度と合流						
平成22年(2010年)	半松	ハンマツ	△崎△久(59)	漁師	17-18	5	高校3年~社会人
平成23年(2011年)	○は	マルハ	△林△幸(43)	水産加工	16	5	高校2年
平成24年(2012年)	浜与	ハマヨ	△崎△弘(40)	水産加工	15	5	高校1年

平成24年12月10日

答志文化保存会会長浜口武次郎氏の協力により作成

キ

九

は

4 各地の寝屋事情

鳥羽市史 下巻 平成3年3月25日

表1 鳥羽の若衆及び青年の寝屋、泊屋の表

鳥羽市史係 長瀬 さん 室

地区	宿呼称	親子の呼称	宿種	年齢	存続状況	主な活動、目的、仕事	親とのつき合い度	備考
鳥羽								
小浜	コサンヤド	—	個人宅	15~30	昭和20年頃まで	天王祭、盆祭、飛島で正月に龍泉寺の薪採り敬老会	薄い	村の東南北の組に一箇所ずつあり、寝泊りはしなかった。有竹作兵衛、カジヤ、与四郎宅
桃取	ナヤ	オヤジ ネヤコ	個人宅	15~25	現存	祭の芝居、神祭、朋輩同志の助け合い、海難救助	濃い (盆正お礼)	昔は学習、研究などをしたが今は雑談、娘の話、漁の話など世間話が多い。
地区	宿呼称	親子の呼称	宿種	年齢	存続状況	主な活動、目的、仕事	親とのつき合い度	備考
答志	ネヤ	ネヤオヤ ネヤコ	個人宅	15~25	現存 (1~3組あり1組に14~15軒あった)	祭参加、神祭、海難救助、消防、朋輩同志の助け合い。	濃い (盆正お祝)	明治44年悪風習として廃止を迫られたが寝る所のない者もあったため存続された。昭和17年青少年団となり、昭和29年より鳥羽市連合青年団に加入。
和具	ネヤ	ネヤオヤ ネヤコ	個人宅	15~25	現存 (現在4軒)	学習、祭参加、海難救助、朋輩同志は冠婚葬祭を一生助け合った。	濃い (盆正はお礼に行く)	答志と同様ネヤオヤの言うことはよく聞き、嫁の世話、人生の相談もする。ネヤオヤの忙しい時は手伝いもする。
神島	ネヤ	ネヤオヤ ネヤコ	個人 共有 (大正15)	17~25	現存	学習、良家でのしつけ、団体生活の修身、海難救助、祭参加	濃い (盆正はお礼する)	大正15年より中・東・南地区に1軒の青年会支部ができ、海難救助には便利になったが学習、修養の目的は薄れた。宿には「団体生活の規律、質実剛健を養ふ」などの目的をうたう。
菅島	ワカイシュヤド	ヤドオヤ ワカイシユウ	個人	15~結婚	昭和24~5年まで (4~5軒)	神祭、礼儀、助け合い、心得違い(盗み)がないよう教育	盆正はお礼をした	盛んだった戦前は4~5軒あり、多い宿には10~15人も泊っていた。宿親とのつき合いは、盆正に食器などを買ってお礼に行ったが、手伝いなどまではしなかった。
坂手	トマリヤド	オヤ<トト カカ	個人宅	14~結婚 16~結婚	昭和18年まで (9軒)	天王祭芝居世話、アヤマ池管理、浜の祝(正月)の世話、盆踊世話、ヒジキ採り。	親の言うことは絶対的だった。	昭和18年坂手青年会の記録に「倶楽部は絶対に聞く事を禁じ、3人以上の集団をして寝ることを禁ず」という記述が見られる。

	地区	宿呼称	親子の呼称	宿種	年齢	存続状況	主な活動、目的、仕事	親とのつき合い度	備考
8	安楽島	トマリヤ	オヤジ	個人宅	16~25	明治末まで	天王祭芝居、年2回の道普請、ヒジキ採り	宿の手伝いもしたらしい。	青年会、処女会に移ってからは会合は学校だった。昔はオヤジは若衆の嫁の世話もしたという。
9	浦村(本浦)	トマリヤ	オヤジ	個人宅	15~25	昭和18年頃まで(4軒)	神祭、盆踊、精霊送り、明け初め、山火事消火、昔は学習もした。救助船(トッペ)のハヤオー掛とログイ作り。	盆正にお礼をするくらい。	半次郎屋のトマリヤが大きく5~6人が寝泊まりをしていた。大正5年頃までアネラ(娘組)とで行う石女子祭があった。昭和の初めからは祭の時しか泊まらなくなった。
10	石鏡	ワカイシヤ(若衆屋)	オヤ <sup>オジ</sup> オバ <sup>オバ</sup> ワカイシユ	個人宅	15~25	昭和15年まで(5軒)	天王祭、盆踊、海難救助、中でも神島と並んで海難救助の賞状は多い。	旅行に行った時は手土産をもつてゆく。	明治23年若衆組より青年会へ変化(組合文書)、その後も昭和15年頃までは盆、正月の祭時は寝泊りをしたが、日常は泊まることはなかった。
11	国崎	ネヤコ	ネヤオヤ <sup>ワカイシユ</sup> (ネヤコ)	個人宅(大正10) ↓ 共有(大正10以後)	15~	大正期(2軒) ↓ 昭和32年まで(1軒)	海難救助、消火、防火、磯場監督、道路補修、演芸会、ヒジキ採り、ワカメ採り。	忙しい時の手伝い、正月一日は「年頭」のおよばれ有り	大正10年頃までは海間谷、里谷各組に1軒のネヤコがあり、その後は芝居小屋を利用して倶楽部が活動し、昭和16年頃まで続く。その後会場を農協倉庫(昭和23年まで)、医者屋(昭和32年まで)と移し青年活動を行ったが昭和32年中断した。
12	相差	倶楽部	ワカイシユ	地下の一室	17~	昭和35年頃まで	天王芝居、海難救助、消防、研究、学習。		大正5年頃倶楽部というのが結成されたが、それまでも寝屋といったものはなかったという。倶楽部になって青年活動をしたが泊まることはしなかった。

	地区	宿呼称	親子の呼称	宿種	年齢	存続状況	主な活動、目的、仕事	親とのつき合い度	備考
13	畔嶋	ネヤ	別になし ワカイシユウ	個人宅	16~25 戦後31歳	昭和20年まで(2~3軒)	八幡神社祭、正月前のオコソイ、若衆死亡時の「ワサンネブツ」	盆正の挨拶	戦後青年会へ移行、入会は親戚と一緒に酒一升をもって挨拶に行き認められるとフトン一式をもって屋移りをする。
14	千堅	賀子	なし						学校を出ると船にすぐ乗ったのでそのようなものはなかったという。
15	船津	ワカイシヤ							昭和10年頃まで部屋わかれという風習があった。
16	岩倉	トマリヤ	オヤジドン	個人宅 納屋	16~25	昭和初に中止	盆祭礼		盆祭の時のみ寝泊まりしただけ。
17	河内				16~		盆祭礼		若衆が盆祭礼をした。
18	松尾	トマリヤ	オヤジ トマリコ	個人宅	16~25	明治40年頃まで	盆祭礼	トマリヤの手伝いもした。	明治末まではトマリヤから盆祭の打ち上げをした。トマリヤのオヤジは厳しかった。
19	白木						盆祭礼		若衆といわれる青年が盆祭をした。